

## 黒毛和種雌牛の一産取り肥育技術の検討

三角久志・徳本 清・津曲博之 (宮崎県畜産試験場)

Hisashi MİSUMI, Kiyoshi TOKUMOTO and Hiroyuki TUMAGARI : Fattening Method of Japanese Black Cow after First Calving

現在、宮崎県内で生産される雌牛の多くが直接肥育に仕向けられている。これらの雌資源の有効利用と肥育経営内での肥育素牛確保及び低コスト生産を図るために、一産取り肥育技術は有効な方法と考えられる。そこで、本報では、一産取り肥育技術を確立するために、分娩までの増体速度を変えることが、分娩、分娩後の増体性及び枝肉成績にどのような影響を及ぼすか検討した。

### 1. 試験方法

試験区分は第1表のとおりで、分娩までの一日増体量 (DG) 0.7kgと0.6kgの2試験区を設け、それぞれ各4頭の黒毛和種雌牛を配置した。交配は体重300kg、体高115cmを超えた後開始し、肥育終了は分娩後6か月以上、体重630kgを目標とした。また、子牛は全頭人工哺育で育成し、人口哺育の方法は代用乳300gを1日2回6週間給与した。

第1表 試験区分

区分	分娩前の飼料給与		肥育期の飼料給与
	設定DG	給与方法	
I	0.7	日本飼養標準の必要TDN量の60%を濃厚飼料で、40%を粗飼料で給与	濃厚飼料自由摂取粗飼料を定量給与
II	0.6	飼料で給与	定量給与

### 2. 結果及び考察

両区の増体成績及び飼料摂取量を第2表に示した。分娩までのDGはI区0.73kg、II区0.63kgとほぼ設定した増体を示した。分娩後の増体はそれぞれ0.60kgと0.54kgでI区が上回り、分娩前の差と併せてI区が早く目標体重に達した。

両区の繁殖成績を第3表に示した。助産はI区2頭、II区3頭と両区とも多い結果となった。これは、初産と

しては子牛の生時体重が大きく、これが大きく影響したと思われる。一般に初産牛は成牛と比較して助産の割合が高く、更に分娩前から肥育を行っているため、その傾向は強くなると思われる。そこで、子牛の事故を防ぐために分娩前後は十分な注意と観察が必要である。

両区の枝肉成績を第4表に示した。ロース芯面積、脂肪交雑はI区が良好で、枝肉格付もI区が良い結果となった。

以上のことから、分娩までの増体を0.7kg程度に高めて、分娩前から肥育を進めた方が、増体及び肉質とも良好な結果となり、収益性の上で有利と考えられた。

第3表 繁殖成績

区分	受胎月	平均受胎月	分娩月	子牛生時体重	助産
	カ月	回	カ月	kg	頭
I 平均	12.1	1.8	21.3	30.3	2/4
SD	0.6	0.8	0.7	3.1	
II 平均	12.7	1.5	22.0	29.6	3/4
SD	0.5	0.9	0.5	5.1	

第4表 枝肉成績

区分	枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	皮下脂肪	脂肪交雑	枝肉格付
	kg	cm <sup>2</sup>	cm	cm		頭
I 平均	382.6	50.0	6.4	2.7	1.42	A-4:4
SD	10.5	3.1	0.7	0.5	0.49	A-3:4
II 平均	372.5	42.5	6.3	2.4	1.25	A-4:1
SD	10.2	3.0	0.5	0.5	0.28	A-3:2 B-3:1

第2表 増体成績及び飼料摂取量

区分	体 重			D G			肥 育 終 了 時		1日当たり飼料摂取量				
	開始時	分娩時	終了時	分娩時	肥育期	全期間	期間	月 齢	I-RS	CWCS	育 成	肥 育	
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	カ月	カ月	kg	kg	kg	kg
I 平均	294.0	525.0	636.8	0.73	0.60	0.58	9.3	30.8	8.8	10.0	4.0	6.5	
SD	14.1	22.5	5.7	0.06	0.10	0.07	2.6	2.5	0.3	0.2	0.2	0.7	
II 平均	284.3	498.3	628.5	0.63	0.54	0.51	11.0	33.2	7.9	8.4	3.4	6.0	
SD	17.1	24.8	7.8	0.02	0.10	0.05	2.6	2.3	0.4	0.3	0.1	0.7	

注) I-RS: イタリアンライグラスサイレージ, CWCS: トウモロコシホールクロップサイレージ